

生きる意味と法

—イアン・マキューアン『チルドレン・アクト』—

恒 川 正 巳

富山大学人文学部紀要第72号抜刷

2020年2月

生きる意味と法

—イアン・マキューアン『チルドレン・アクト』—

恒 川 正 巳

現代英国を代表する小説家イアン・マキューアン (Ian McEwan, 1948-) の作品では、1987年出版の『時間のなかの子供』(*The Child in Time*) 以降、倫理的葛藤を描く傾向が顕著になってきた。マキューアン作品の主人公たちは、しばしば自己利益の追求と他者を思いやる気持ちの間に生じるディレンマに引き裂かれる。そのもっともドラマティックな事例は、批評家のリン・ウェルズが指摘しているように、『愛の続き』(*Enduring Love*, 1997) の冒頭のシーンかもしれない。そこでは主人公のジョー・ローズ (Joe Rose) が、いち早く気球から手を放して他人を見捨てて生き残るか、それとも自分が死ぬことになるのを覚悟のうえで気球にぶら下がり続けるのかの選択を迫られる (Wells 29)。まさに思考実験のような悲劇的なディレンマである。『アムステルダム』(*Amsterdam*, 1998) と『ソーラー』(*The Solar*, 2010) では、同様の葛藤に直面する主人公たちが、あからさまに、あるいは冷酷に自己利益の追求を選択する様子が描かれている。人はたとえ他者へのじゅうぶんな思いやりを持っていたとしても、他者理解は容易ではなく、結果として重大な過ちにつながってしまう。『贖罪』(*Atonement*, 2001) と『チェシル・ビーチにて』(*On Chesil Beach*, 2007) では、悪意がなくとも生じてしまう偶発的な罪と悲劇を描く。

2014年に発表された『チルドレン・アクト』(*The Children Act*) も、この流れのなかに位置し、主人公である英国高等法院の家事部の裁判官フィオーナ・メイ (Fiona Maye) が直面する苦悩を描いている。マキューアン作品は、社会的地位が高い人物を主人公に、国家あるいは社会制度の様相を描くという側面も持ち合わせており、ここでもその特徴が見られる。¹⁾ マキューアンは、英国で実際に起きたいくつかの有名な裁判事例から物語を紡いでいる。²⁾ 小説の中心となるのは、白血病で輸血をしなければ死を免れない患者とその家族が、信仰心から輸血を拒否することで生じた裁判である。患者のアダム・ヘンリ (Adam Henry) は17歳の少年であり、わずか数ヶ月の差ではあるものの、法的にみずからの治療方針を決定する権限を有する年齢に達していない。そのため本人に代わって輸血をして彼の命を救う許可を求める病院側と、輸血を拒否する彼の家族が法廷の場で争うことになる。フィオーナはその裁判をつうじて、1989年児童法 (小説のタイトルでもある *The Children Act*) に明示される、児童の幸福を最優先する精神が具体的に何を意味するのかを熟慮し、判決を下す。フィオーナは模範的裁判官であり、彼女の判決は、現実の状況を的確に把握し、法の精神を人間らしい暖かみを保持しながら具現

することに成功したかに見えた。しかし彼女の意図に反して、その判決は最終的にアダムの死へと帰結してしまう。

本論では、フィオーナが直面する倫理的葛藤を描いた『チルドレン・アクト』の特徴を以下の点にあると考える。物語は、彼女が担当する裁判の描写をつうじて、法と信仰の関係を焦点を当てる。そうすることで、現代的な法を支える無神論的合理主義が、信仰心をどう処遇すべきかについての問いを投げかけている。フィオーナの裁判官としての達成と挫折の両方が描かれ、法律家の論理的知性や抽象思考と個別的現実の理解とを融合することの重要性が示されると同時に、その困難さや危うさも示されていく。そこには裁判官が一人の人間として直面する、個人的領域と職業人としての領域とを分離する困難さと苦悩が織り込まれている。二人の病室での出会いは、アダムの命を救うことにつながり、フィオーナに裁判官としての大きな達成感をもたらした。しかし、二人の二度目の邂逅は、アダムの死につながり、フィオーナは人としての大きな罪悪感に飲み込まれることになる。二人の二度の体面では、音楽と詩が大きな象徴的役割を果たしている。

フィオーナは高等法院の家事部の裁判官として、離婚や子供の養育にかかわる争議に法的判断を下している。そこではしばしば合理主義と信仰の対立が発生する。フィオーナが裁いた超正統派ユダヤ教を信仰する夫婦間の子どもの養育をめぐる争いでは、厳格に戒律に即した環境で子どもを育てたい夫と、イギリスの世俗的な社会の現実を受け入れ、より自由な環境で子どもを育てたい母親が法廷の場で争う。また、身体が結合して生まれた双生児の裁判では、人為的な処置を施し、双生児のうちの1名だけの命を救うのか、それともカトリック教徒である双生児の両親が望むように、人が個々の命の軽重を判断するなどという傲慢さを慎み、結果として2名とも死なせてしまうのかの選択が迫られた。そしてアダム・ヘンリーの裁判では、エホバの証人の教義にしたがい、アダムの命を失うことになろうとも輸血を拒む両親ならびにアダム自身と、救える命をみすみす失うことをよしとしない医療関係者との間に埋めがたい溝が生まれることになる。そこでは神権政治的世界観と啓蒙主義以降の現代人の世俗的世界観との衝突が見られる。信仰心からあえて不自由を甘受しようとする人たちの意志をどこまで認めるのか、あるいは世俗的な自由がそもそも正しくないものなのか。救える命を見捨てるのか、あるいはそれはそもそも救うべき命ではないのか。こうした案件についての法的判断を下すことをフィオーナは求められる。篤い信仰心が合理主義的社会的慣習と相いれず、法の判断が求められるとき、そこでは現代的な法の論理が、みずからを成立させている原理とは異質なものと向き合っているともいえる。すべての事物について、あらかじめ内包された正しさや目的を認めようとする包括的な自然法の立場と、法を人間が一定のプロセスのもとに作りあげたものにすぎないものとしてとらえる実証主義的立場が対峙しているのだ（ハート 290-302; Morgan 142-

43)。

ここではパターンリズムの問題も生じている。法は、当事者の幸福を本人の意志に反してどこまで規定しうるのか。人が何をもって幸福であるとするかは、どんな生き方を善しとするかに左右される。司法が人の幸福を判定したり、利害の対立する人々の間での便益の配分にかかわる判断を下すとき、そこには道徳がかかわってこざるをえない。法が社会のなかの多数派の価値観を体現する傾向から逃れられない以上、法と道徳の結びつきがあまりに強いと、少数派を対象とした社会的抑圧を生み出す危険性も高まる（赤林 72-79）。アダム有病状をめぐり、エホバの証人の信者は信仰にもとづき多くの人々には特異と感ぜられる選択をする。裁判では、法が彼らの決断にどこまで干渉し、彼らの自由をどこまで制限することが許されるのかが問題となる。

そしてそれはまた、意志の自律性の問題でもある。フィオーナが判決を下す根拠となる1989年児童法は、18歳以上の者の自律的意思決定が尊重されるべきことを規定すると同時に、18歳に満たない者の幸福の擁護者としての役割を法に与えている。アダムが輸血を受けるべきなのか、本人の希望どおりに輸血を行わずに死を受け入れるかの判断は司法が下すことになる。その際の重要な論点のひとつは、彼の意志が自由と確固たる自己支配にもとづくものであるかどうかである。アダムが両親やまわりの大人が信じる信仰の教義に他律的に縛られていないことが重要になる。フィオーナは最終的にアダムと彼の両親の意向を却下し、アダムへの輸血を許可する。小説が主人公のフィオーナを模範的な裁判官として描いていることを考えれば、彼女が体現する無神論的合理主義が信仰心を上回る徳を持つことが示されているとよい。³⁾

フィオーナはいかなる意味で模範的裁判官なのか。それは彼女が原理原則を重んじる抽象思考と具体的現実へのすぐれた感受性の両方を持ち合わせているからである。自身も裁判官であったルース・ヘルツ（Ruth Herz）は、法律家の思考の特徴は、現実を「骨格だけにすること」（“skeletonizing”）だと述べている（123-27）。裁判官が判決を下すにあたり、まず心がけるべきは法を適切に解釈し応用することである。そのためには規則性になじまない、個人的で個別的な特徴、つまりは個々の案件のリアルさ、人間らしさをそぎ落とさなくてはならない。裁判官には個人的な考えを判決に持ち込まないのはもとより、個人的側面を考慮しない思考法を駆使することが求められる。そのために書物を読み込み、文章と言葉への敏感な感覚を磨き上げる必要がある。ただ、そうした努力の結果として、現実世界から疎遠になりがちな傾向が生じることは否めない。裁判官が、慣れ親しんだ書物の世界とは大きく異なる現実の生々しい争いを裁く様子は、「盲人を導く盲人」に喩えられさえるという。小説の描くフィオーナは、知的に卓越しているだけでなく、訴訟にかかわる人々への責任感と配慮を持ち合わせており、法律思考の陥りがちな非人格的な無慈悲さを回避することに成功している点で優れた裁判官なのである。

イリス・ヴァン・ドンセラアル (Iris van Domselaar) の言葉を借りれば、フィオーナは優れた知覚を備えた裁判官、“a perceptive judge”である (71-82)。合理的で体系化された規則や原理を適切に運用できる知性だけではなく、現実において事実と価値が分かちがたく結びついていることを理解するための「裁判官にふさわしい知覚」(judicial perception) を備えている。裁判官が備えるべき知覚は、倫理的知覚の領域に属するものであり、そこでは自己と他者の利害が複雑に交差し、千変万化する具体化した状況に対応する柔軟さが必要とされる。フィオーナはそうした裁判官像を体現している。

ただ、『チルドレン・アクト』はフィオーナの成功ばかりを描いているわけではない。むしろ彼女の苦難をつうじて、知覚に優れた裁判官が直面するディレンマ、みずからの人間としての感受性を織り交ぜながら客観的公平性を保つことの危うさを描くほうにこそ主眼があるといえる。

『チルドレン・アクト』は終始一貫して、フィオーナの私生活と裁判官としての責務とが交錯する様子を描いている。物語の冒頭で、フィオーナは20年以上連れ添った夫のジャックから突然、別の女性と関係を持つつもりであることを告げられる。ジャックは、フィオーナが彼との関係、とくに性生活を重んじなくなってしまったことに失望し、20代の統計学者の女性との性交渉を求めるのだと宣言する。フィオーナとの関係を壊すつもりはないと説明するジャックに、フィオーナは自分以外の女性と寝るのなら夫婦としての関係は終わりであり、一切の妥協はないと宣言する。まもなくジャックはスーツケースとともに家を出て行く。ジャックが家を出る直前にオフィスからの電話を受けたフィオーナは、アダムへの輸血をめぐる一時を争う裁判を担当することになったことを知る。アダムの裁判は、フィオーナにとって私生活における人生最大の混乱のなかで進行するのである。

結果的に、フィオーナはプライベートな面での混乱をまわりに気取られることなく、アダムの裁判を見事に裁き終え、大きな満足感に包まれる。アダムの病室を訪れるという決断は異例のもので、テムズ川の南にある病院に向かうタクシーのなかでフィオーナは、私生活で神経衰弱寸前の状態の自分が不必要に感傷的になり、仕事で誤った判断をしてしまったのではないかと不安になる – “a woman on the edge of a crack-up making a sentimental error of professional judgement” (91)。しかしアダムの病室に入ってすぐ、彼女は “She was right to have come” と訪問の決断が正しかったことを直感的に確信する (102)。フィオーナは、ジャックとの夫婦関係の崩壊という私生活上の重大事件が裁判官としての領域を侵食するのを許さなかった。むしろプライベートで負った傷が、未成年の幸福を守る裁判官としての彼女の熱心さと思いをやりをいっそう引き出したといえる。

しかし一方で、裁判官としての多忙な日々は、たしかに彼女の私生活に影を作り出していた。ジャックはフィオーナが性交渉に関心を示さなくなったことに夫婦関係の重大な変質を感

じ、大きな不満を抱いた。じつはその原因はフィオーナが担当した結合双生児の裁判にあった。的確な判決を導き出すため、フィオーナは双生児の肉体を写した写真を頭に焼き付け、肉体を分離するための施術を克明にイメージする。その結果、耳目を集める裁判を無事に終結に導いた代償として、フィオーナは人間の肉体に胸が悪くなるようになってしまった。ジャックとの関係がぎくしゃくしたのもそのせいだったのだ。フィオーナはそれを夫に打ち明けることはせず、裁判官としての責務が生み出した影をひとり抱え込んでいる。一刻を争うアダムの案件で困難な判断を下すことを要求されたにもかかわらず、最善の結論に到達できたという達成感を胸に満ち足りた気持ちで帰宅した夜、フィオーナを待っていたのは出戻ってきた夫のジャックだった。アダムの失われかけていた幸福を救ったフィオーナだが、ジャックとの関係を修復する術は見つからない。第1章から第3章では、フィオーナがプライベートな面とプロフェッショナルな面の激しい相克を抱えながらも、裁判官としての責務を模範的に遂行する姿が描かれる。しかし、児童法の精神を具現しアダムの未来を救いえたという際だった達成感は、彼女の私生活の空虚さと表裏一体である。

アダムの病室への訪問をつうじて、フィオーナはアダムを、法廷で記号（“A”）によって指される抽象的で普遍的な存在ではなく、一人の人間として固有の人生を送る若者として理解する機会を得る。それにより、彼の未来を奪わないことが彼の幸福にとってもっとも大切なことであると確信し、アダムに輸血を処置すべきであるという結論に至るのである。フィオーナとアダムとの約1時間の面会は二人の間に共感と信頼関係を生み出した。アダムにとってフィオーナとの出会いは、失われかけていた人生を取り戻すことになった再出発の起点であり、フィオーナにとっては裁判官が担う役割の社会的、人道的意義の再確認と、みずからの存在意義をたしかに肯定する判決につながるものだった。

病室を訪れたフィオーナを特徴づけるのは、即興的対応の妙である。病室に足を踏み入れた瞬間から、フィオーナは自分では制御できない事態の進行の渦中に置かれる—“for the boy was already talking to her as she entered, the moment was unfurling, or erupting, without her and she was left behind in a daze” (99)。しかし彼女はそうした状態にうろたえてはいない。綿密に計画された筋書きどおりに面談が進むことを期待するのではなく、むしろあえて予測できない状況に身をゆだね、不確実性のなかでこそ見いだすことができる真実をつかもうとしている。フィオーナはたまたま思いついたことをあえてそのままアダムに話していく。その自由な連想は、端から見れば自由すぎる、突拍子もないものと聞こえるかもしれないが、フィオーナは意に介さない—“Fiona was free-associating, as though to a colleague, about a forgotten institutional scandal of the 1980s. But what Marina thought did not really trouble her. She would do this her own way” (101-02)。果たしてうまくやりとげられるのか。その見通しについても彼女は楽観的である。たとえ何を話したらよいかわからなくてもなっても、過去に同様の場面を切り抜けてきた経験が彼女の

楽観を裏打ちしている – “She didn’t know, not immediately. . . . Fiona hoped that by starting to speak she would discover what she thought. It was like being at school. Back then she had mostly got away with it” (110-11)。そもそもフィオーナにとっては病室という場所自体、たいへん好ましい環境だった。彼女は13歳のときに自転車事故で入院を経験している。それは苦しみのない楽しいばかりの入院生活であり、彼女の自己肯定感を強める貴重な経験であった。そのときの思い出もここでの彼女を支えている。

フィオーナは、アダムに会った瞬間から好感を抱く。彼の容貌が美しく、声が魅力的であることをフィオーナはすぐに感じとる。アダムが病気のためにやせ細っているのを見たフィオーナは、みずから料理を振る舞っておいしいものを食べさせたいと母親的な思いを抱く。彼としばらく会話したフィオーナは、自分がアダムへ自然に好意的な感覚を持つ背景には、彼の本質的な純真さ (innocence) があることを悟る。知的に早熟な17歳の青年は、家族が信仰する宗派の教えに従い、現代社会から距離を置いて育てられてきた。その結果、彼は同じ年頃にあるフィオーナの姪や甥たちには見られない、無防備な純粋さをまとっている。世俗の世界からの遠さ、世慣れていない誠実さは、アダムに子どものような無邪気さを与えている。そのことが、彼にとっての幸福とは何であるのかを判断をしなければならない立場にあるフィオーナを強く動機づけることになる。信仰心に根ざした目的論的世界観を表明するアダムの言葉 (“There isn’t much to say. We know what’s right”) は、一瞬、司法の意義についての根本的な懐疑をフィオーナの心に引き起こす – “Religions, moral systems, her own included, were like peaks in a dense mountain range seen from a great distance, none obviously higher, more important, truer than another. What was to judge?” (112)。しかし、アダムの純粋さは彼女を本来の役割に引き戻すのだ。

最終的にフィオーナとアダムを分かちがたく結びつけたのは、芸術の生み出す象徴的な一体感だった。フィオーナは法曹界の社交コンサートでピアノ演奏をするアマチュア音楽家である。そのレパートリーのなかに、イエイツ (W. B. Yeats) の詩にブリテン (Benjamin Britten) が曲をつけた「サリー・ガーデン」 (“Down by the Salley Gardens”) があった。最近になってヴァイオリンを習い始めたアダムは、偶然にも「サリー・ガーデン」を病室で演奏してみせる。二人は高揚し、今度はフィオーナが歌唱で加わり、もう一度「サリー・ガーデン」を演奏する。同じ楽曲に心を寄せることで、二人は瞬時にしておたがいへの共感で満たされる。信仰の命ずるままに死を受け入れようとするアダムと、無視論的合理主義の代弁者であるフィオーナとの間にあった根源的対立は、音楽が喚起する普遍的な感情によって中立化され、二人の間には調和の絆が紡がれる。42歳の年齢差を超えて二人は、比喩的時間のなかで「サリー・ガーデン」の恋人同士に重なってゆく (Houser 68-69, 74-75; Escoza 446-48)。二人の間に生じたこの豊穣感は巧まざるものであり、二人で「サリー・ガーデン」を演奏することを提案したフィオーナも、自身の行動に驚きを禁じえない – “The situation, and the room itself, sealed off from the world, in

perpetual dusk, may have encouraged a mood of abandon, but above all, it was Adam's performance, his look of straining dedication, the scratchy inexperienced sounds he made, so expressive of guileless longing, that moved her profoundly and prompted her impulsive suggestion" (116)。ここでは、まったく予期できないかたちで現実世界に意外な帰結をもたらす芸術の力に光が当たっている。マキューアン作品の読者は、『土曜日』(Saturday, 2005)において、同じようにマシュー・アーノルドの詩「ドーバー海岸」(“Dover Beach”)の朗読が、主人公の娘を暴漢から守ったエピソードを思い起こすだろう。フィオーナは、論理思考だけではなく、現実の状況を尊重し、他者の介在により必然的に生じる不確実性を理解し、即興的で柔軟な対応を心がけている。彼女のその姿勢が、意識的には利用することができない、芸術の自発的な力を呼び込んだといえる。

すぐれた知性と鋭敏な現実感覚をもつフィオーナの裁判官としての姿勢がアダムの命を救うことにつながった。しかし物語はその後、彼女のそうした姿勢こそがあらたな倫理的ディレンマを生み出していく様子を描くことになる。判決後、命をとりとめたアダムは、病室でのフィオーナとの共感をさらに発展させることを望んだ。彼は一連の出来事をつうじて、宗教的世界観にもとづかない人生の可能性を実感し、あらたな生き方を模索するための先導者としての役割をフィオーナに求めたのだ。しかしフィオーナは職業的倫理観から裁判当事者との接触を避けることを選択し、アダムからの手紙に返事を出さなかった。フィオーナへの切望を抑えきれないアダムは彼女を求めて、ストーカーまがいの非常識な接近を試み、彼女のプライベートな空間にまで入り込み始める。裁判官としての職業領域とパーソナルな領域の分けの難しさが、再びフィオーナを悩ますことになる。アダムの世間ずれしていない純粹さと危うさは、病室での面談の際にはフィオーナの心の琴線に触れた。しかし今度は、彼のその純粹さがいびつな形を描き出す。

フィオーナが巡回裁判のためにニューカッスルに向かうと、アダムはロンドンから彼女を尾行して彼女が滞在している館にやってきてしまう。アダムはジャックとフィオーナのもとで暮らすことを望むが、フィオーナは受け入れられないと答える。タクシーにアダムを送り出そうとする直前、フィオーナは彼の頬にキスをしようとするが、それが意図せず唇へのキスになってしまう。

Lightly, she took the lapel of his thin jacket between her fingers and drew him towards her. Her intention was to kiss him on the cheek, but as she reached up and he stooped a little and their faces came close, he turned his head and their lips met. She could have drawn back, she could have stepped right away from him. Instead, she lingered, defenceless before the moment. The sensation of skin on skin obliterated any possibility of choice. If it was possible to kiss chastely full on the lips, this was what she did. A fleeting contact, but more than the idea of a kiss, more than a mother might give her grown-up son. Over in two seconds, perhaps three. Time enough to feel in the softness of his lips that

overlay their suppleness, all the years, all the life, that separated her from him. As they withdrew, a slight adhesion of skin might have drawn them back together. But there were approaching footsteps on the gravel and on the stone steps outside. She let go of his lapel and said again, 'You must go.' (169)

このキスは、二人の関係に複数のあらたな意味を刻印することになった。まず、このキスによって二人は、年齢差を超えて男女としての関係の入り口に立った。「サリー・ガーデン」の演奏によって二人が築いた象徴的な恋人関係は、アダムのアマリの純粋さゆえに現実世界へと侵出してしまふ。フィオーナは個人としての感情と職業的判断の間の仕切りを維持しようと努めてきたが、それは完全に崩壊してしまった。その影響は時間をさかのぼり、以前の病室での二人の関係にも異なる意味を与えることになってしまう。病室でのフィオーナは、じゅうぶんに理性的だったといえるのか。アダムを救った判決は、客観的な解釈のもとに法の精神を当てはめたというよりは、アダムへのあまりに個人的な好意から生まれたものではなかったか。読者は、そしてフィオーナは、彼女の過去の判断の妥当性への疑惑を抱かざるをえない。あのときの彼女はジャックとの結婚生活の崩壊の無視できない影響の下にあったのかもしれない。フィオーナが病室に入った瞬間からアダムに魅力を感じていたのも、キスの場面の記述から逆算すれば、ジャックを失った喪失感のために彼女が無意識にアダムを求めていたことの表れだったとも解釈できる。あるいは、アダムは生まれてきてよかったはずの彼女の子どもの代理だったのだろうか。フィオーナは、裁判官としての成功を追求する過程で子どもを出産する機会を逸した。ジャックとの夫婦関係の崩壊はあらためて彼女に、自分が母として、女としての幸福をつかみ損ねたことを感じさせるものだった。その索漠とした思いのなか、生まれてきてよかったはずの彼女の子どもの面影をアダムに求めたことが、彼女のアダムへの好意と母性的な思いやりの源だったとも考えられる。このようにニューカッスルでの出来事は、二人の関係のあらたな意味を掘り起こしてしまうことになる。読者にとって、それはフィオーナの行動をそれまでとは大きく異なる視点から解釈することを要求する仕掛けであり、他方フィオーナにとっては自己理解の崩壊を意味した。二人のキスはフィオーナの内なる混沌の扉を開け放ってしまったのだ。彼女がこれ以降アダムに向き合うことができなくなったのも不思議ではない。

二人の関係が根本的に変わってしまった後、「サリー・ガーデン」によって生まれた二人をつなぐ比喩的空間も変容を遂げる。病室では異なる立場の二人を共感で結びつけ、生の輝きを実感させた芸術の力が、今度は二人の断絶を象徴し、あの病室での二人の時間をまったく異なる色合いに染め上げてしまふ。ニューカッスルで別れた後、アダムは二人の関係を題材にした詩をフィオーナのもとに届ける。それは宗教的アレゴリーであり、信仰なき世界への失望とフィオーナを得られなかった絶望、そしてみずからの行動への後悔と罪悪感が表されていた。その詩の最後の書きかけの部分では、生きる目的を失ったアダムが死を選ぶことが示唆されていた。しかし、フィオーナにはもうそれを読み解くことができない。フィオーナはクリスマス・コン

サートでの演奏の直前にアダムの死を知る。彼女は抑えきれない感情に押し流されるように、当初予定していた曲に代わって「サリー・ガーデン」を演奏する。それは聴衆の心を揺さぶる感動的な演奏だった。「サリー・ガーデン」の詩に登場する若者の後悔の念が、アダムとフィオーナのそれぞれの後悔と罪悪感と一体となり、病室での演奏のときは正反対の悲劇的な調べを奏でたのだ。

アダムの死を知ったフィオーナは激しい後悔のなか、人生の意味を探して彼女を頼ってきたアダムを突き放してしまった自分を厳しく責める。アダムはフィオーナが体現する合理主義的世界観によって命を救われ、その結果として信仰に根ざした目的論的自然観を失った。隅々まで神の意志で充たされていた世界は、突然その意味を失ってしまう。アダムには生き続けるための理由が必要となったのだ。人が幸福であるためには、みずからが善いと思える何かを必要とする (Foot 56, 97)。アダムがそれを求め、子どものような純粹さとよろける足取りで歩み始めたとき、支えをもとめて彼が差し出した手をフィオーナは握り返すことができなかった。その意味で彼女は、児童の幸福を第一義とする1989年児童法の精神を体現することができなかった。彼女の判決はアダムを一度は救ったが、そこでアダムとの関係を終わらせようとした彼女は、児童法を人間の心を欠いた形骸にしてしまった。フィオーナはそう自分を責める。

フィオーナがアダムにもたらした合理主義は、結果的にアダムを幸福にしなかった。物語は、合理主義が信仰心を完全に打ち負かし、すべての問題を解決すると示しているわけでは毛頭ない。しかしだからといって合理主義を否定しているわけでもない。作品が、そしてマキューアンが、盲目的になりがちな信仰心よりも合理主義のほうが人間的であると考えているのはまちがいない。しかし同時に、無神論的合理主義が人間の幸福を十全に保証してくれるわけでないこと認識していることも疑いようのないことである。合理主義は、他律的ではなく、人がみずから理由づけと省察をつうじて精神の卓越性の意味を発見することを促す。そうした意味を願望することが人の幸福を生み出すのだと考えるのである。マキューアン作品で支持されている合理主義では、互いの差異を認め合う、教条的でない柔軟な人間観と複眼的な世界観が肯定される (Escoza 443-44)。ただしそれは、解決しがたい葛藤に具体的な答えを与えてくれるものではない。合理主義は宗教的罪悪感から解放された世界をもたらすかもしれないが、そこでは人間は依然として脆弱で不完全であり、それゆえの罪悪感が私たちを待ち構えているのだ。

同様に司法もまた完全ではありえない。フィオーナの同僚のランシー (Sherwood Runcie) が判決を下したマーサ・ロングマン事件は、司法が結果的に邪悪な振る舞いをしてしまうことを如実に示している。合理主義を旨とする現代の司法が、無実のマーサを我が子殺しの罪で服役させ、絶望した彼女は釈放されてまもなく亡くなってしまふ。フィオーナは、ランシーに会うたびに、司法の持つおぞましい一面、毒蛇のような性質を思い出さずにはいられない—“she only needed to summon the case of Martha Longman and Runcie’s lapse to confirm a passing sense that

the law, however much Fiona loved it, was at its worst not an ass but a snake, a poisonous snake” (51)。ランシーは、物語の最後近く、クリスマス・コンサートでフィオーナが演奏しようとする直前に、わざわざ舞台袖に現れ、アダム之死を彼女に伝える。ランシー自身がまさに楽園崩壊を告げる蛇であることを思わせる、悪意さえ感じさせる行動である。法は、他者との交わりから生じる不確かさ、状況に依存する不確か性から人を完全には守ってはくれない。それどころか、毒蛇と化して率先して人を不幸に陥れることすらある。法を体現する裁判官も、その脅威から特別に守られているわけではない (Morgan 144-46)。

アダム之死を知ったフィオーナは、みずからの行動を正当化することもなければ、弁解もしない。ニューカッスルでの出来事のあとのフィオーナの行動は、倫理的に不作為の批判を免れないかもしれない。しかしアダムがみずから死を選択したことを知ったあと、彼女はひたすら自分を責める。彼女はみずからの内面の混乱を直視できないまま、意識下での保身本能にしたがってアダムを遠ざけた。その結果、彼女に託されていた利他的使命を、アダム之幸福を見守るという役割を果たせなかった。今その事実に向き合う彼女には後悔しかない。そして彼女が感じる罪は、アダムに手を差し伸べなかったことだけにあるのではない。アダムは彼女を人生の導き手として選んだのだが、そもそも彼女はそのような資格などない人間だったのだとフィオーナはみずからを蔑む。彼女は上層中産階級に属し、若いころから模範的な人生を送ってきた。社会が用意したルールから外れることなど、ほとんど考えたこともなく、冒険といえは16歳のときにほんの短期間だけ、ニューカッスルでロックバンドのグルーピーをしていたことぐらいであった。理性を重んじ、分別を失うことがない、誰からも尊敬される人間である一方、想像力に欠け、リスクを避け、まじめすぎる、つまらない女でもある。そんな彼女を師として選んでくれるなど望外の喜びではないか、なぜそれがわからなかったのか。自分はなんて愚かで傲慢だったのか。フィオーナは今までのみずからの人生を全否定して自分を責め立てる。ここでのフィオーナに利己的なところはない。自己を犠牲にしてもアダムを救えなかったことへの激しい悔いと怒りで、自分を容赦なく引き裂いている。

『チルドレン・アクト』は、深く傷ついたフィオーナの再生を暗示して終わる。泣きながら眠ってしまったフィオーナに寄り添うジャックの姿は、『土曜日』の終わりの場面を思い出させる。『土曜日』の最後にも、主人公ヘンリー・ペロウンが妻ロザリンドとともにベッドに横たわる場面がある。ヘンリーは脳外科医としての専門的な技術を駆使し、自宅に押し入ったバクスターの命を救う。それによって彼は、アーノルドの詩が作り出したバクスターと娘デイジーとの間のつかの間の共感を現実世界での解決へつなげることに成功した。ヘンリーが自分の家族を傷つけようとしたバクスターへの復讐心に囚われることはなかった。この点で彼は、パーソナルとプロフェッショナルの調和を果たしたといえる。他方、『チルドレン・アクト』は、「サリー・ガーデン」が生み出したフィオーナとアダムとの共感が予期せぬ成り行きを見せ、フィ

オーナを翻弄する様を描いている。フィオーナのパーソナルな面とプロフェッショナルな面は互いに影響しあい、ともに軌道から外れていく。そして作品の最後では、自己批判の闇に沈み込んでいくフィオーナを救うのが、ジャックの思いやりであり、フィオーナの負った深い傷への共感であることが暗示されている。ジャックのやさしい哀れみがフィオーナの罪悪感を消し去るわけではない。しかし、物語の冒頭で愚かで身勝手な行動をとることでフィオーナを傷つけたジャックが、最後に深い思いやりと慈しみを彼女に示すことこそが、人間の不完全さへの許しを象徴している。アダムの死によって失われてしまったフィオーナの人生の意味を回復させる力をここに見てとることができる。ジャックによるパーソナルな許しは、フィオーナが引き続き未成年の幸福を見守る法の番人として、大きな罪悪感を抱えながらもその役割を果たしていくことが可能であることを暗示している。

マキューアンは、ガーディアン紙 (*The Guardian*) において『チルドレン・アクト』の創作過程について語っている (“The Law versus Religious Belief”)。小説執筆のきっかけとなった何人かの裁判官との出会いのなかで、彼は裁判官と小説家がとても似通っていると感じたらしい。裁判において神のような存在であることが期待される裁判官に、物語世界における全知の地位にある小説家の姿が重なると述べ、彼らの書く判決文はオースティン (Jane Austen) やコンラッド (Joseph Conrad) 作品と同じ道徳的探求の伝統に属していると述べている。ただし、小説家と裁判官には決定的な違いがある。それは、裁判官はかならず判決を下さなくてはならないのに対し、小説家は物語を問題の解決で終わらせることが義務づけられていないことである。裁判は評決とともに終了しなければならず、どんなに解決しがたい葛藤であっても、何らかのかたちでの解決、あるいは解決の体裁を整えなければならない。他方、小説家は、解決しがたい葛藤に具体的な解決策を提示しなくても、その苦悩を深く描くことで物語を終わらせてもよいという特権を持つ。この文学的特権は、小説というジャンルの別の特徴、すなわち他者への共感と理解をテーマとして内包する形式であるという特徴と結びついている。『チルドレン・アクト』は、フィオーナの倫理的罪を裁かないまま、ジャックとの和解を示唆して終わる。それはフィオーナの行動の倫理的意味の考察よりも、倫理的過ちを包み込むエンパシーの重要性を示唆したエンディングであり、小説家ならではの選択といえる。

注

- 1) この点については、たとえばトンキン(Boyd Tonkin)の書評を参照。小説家のテッサ・ハードリー(Tessa Hadley)は書評で、マキューアン作品の権力への関心を否定的にとらえている。
- 2) 『チルドレン・アクト』の素材となった裁判については、マキューアン自身の“The Law versus Religious Belief”とウォード(Alan Ward)の“To Die or Not to Die: That is the Question”を参照。
- 3) この点で、小説が公平な立場をとっていないという不満を表明する書評もあった。無神論的合理主義と信仰のディベートが描かれているのに、最初から合理主義の立場が優遇されており、信仰には正当な発言権が与えられていないという主張である。コノリー(Cressida Connolly)とウォルトン(James Walton)の書評を参照。

引用文献

- Connolly, Cressida. “Improbable, Unconvincing and Lazy—Ian McEwan’s Latest Is Unforgivable: A Review of *The Children Act*, by Ian McEwan.” *The Spectator*, 6 September 2014, <https://www.spectator.co.uk/2014/09/the-children-act-by-ian-mcewan-review>. Accessed 7 September 2019.
- Domselaar, Iris van. “The Perceptive Judge.” *Jurisprudence*. vol. 9, no. 1, 2018, pp. 71-87.
- Escoza, Cássia. “Law and Literature: Interdisciplinary Reflections from The Work *The Children Act*, By Ian McEwan” *Anamorphosis*. vol. 2, no. 2, 2016, pp. 433-57.
- Foot, Phillipa. *Natural Goodness*. Kindle ed., Clarendon, 2001.
- Hadley, Tessa. “*The Children Act* by Ian McEwan Review—The Intricate Workings of Institutionalised Power.” *The Guardian*, 11 September 2014, <https://www.theguardian.com/books/2014/sep/11/the-children-act-ian-mcewan-review-novel>. Accessed 7 September 2019.
- Herz, Ruth. “Anatomy of a Judge.” *Law and Humanities*. vol. 9, no. 1, 2015, pp. 123-135.
- Houser, Tammy Amiel. “Tragedy in Ian McEwan’s *The Children Act*.” *Genre*. vol.51, no. 1, April 2018, pp. 53-79.
- McEwan, Ian. *The Children Act*. Vintage, 2014.
- . “The Law versus Religious Belief” *The Guardian*, 14 September 2014, <https://www.theguardian.com/books/2014/sep/05/ian-mcewan-law-versus-religious-belief>. Accessed 7 September 2019.
- Morgan, Ben. “Law in Action: Ian McEwan’s *The Children Act* and the Limits of the Legal Practices in Menke’s ‘Law and Violence.’” *Law and Violence: Christoph Menke in Dialogue*, by Christoph Menke et. al., Manchester UP, 2018, pp. 137-66.
- Tonkin, Boyd. “Ian McEwan, *The Children Act*, Book Review: A Thrillingly Grown Up Read.” *Independent*, 26 August 2014, <https://www.independent.co.uk/arts-entertainment/books/reviews/the-children-act-by-ian-mcewan-9691662.html>. Accessed 7 September 2019.
- Walton, James. “Review: ‘Diminishing Returns.’” *The Telegraph*, 3 September 2014, <https://www.telegraph.co.uk/culture/books/bookreviews/11061406/The-Children-Act-by-Ian-McEwan-review-diminishing-returns.html>. Accessed 7 September 2019.
- Ward, Alan. “To Die or Not to Die: That is the Question.” 22 September 2016, <https://www.gresham.ac.uk/lectures-and-events/to-die-or-not-die-that-is-the-question>. Accessed 7 September 2019.
- Wells, Lynn. “Moral Dilemmas” *The Cambridge Companion to Ian McEwan*, Kindle ed., edited by Dominic Head, Cambridge UP, 2019, pp. 29-44.
- 赤林朗, 児玉聡編『入門・倫理学』勁草書房, 2018.
- ハート, H. L. A. 『法の概念』第3版. 筑摩書房, 2014.